

## 第3回高校生学芸員展を終えて

本丸生野

はじめに

- 1 高校生学芸員展の開催までの経緯
- 2 実施相手校の決定
- 3 第3回展について
  - ・ 展覧会像を模索
  - ・ 延長画
  - ・ 作品選定
  - ・ 授業スケジュール
  - ・ 展示作業
- 4 第1回展、第2回展との比較
  - ・ 対照表
  - ・ 第1回展の授業の流れと特色
  - ・ 第2回展の授業の流れと特色

まとめ

はじめに

高等学校の生徒が学芸員として展覧会を企画する事業、通称「高校生学芸員展」はこのたび3回目が終了した。美術館と高等学校のコラボレーションによる本事業は、美術館が社会教育施設として期待されているところの“地域（の高等学校）との連携”の成果として少なからず注目されてきた。昨今は「所蔵品を美術館外で活用して欲しい」とのニーズも増加傾向にある。本事業はその需要に応えるものでもあるため、実施内容を具体的かつ詳らかに紹介されるのを待つ以前に、「先進的」であり「時代のニーズに合致」しているとされ、容易に高い評価を受けがちである。

3回展を経た今、それを反芻し、咀嚼し、見直しを図る作業が大変重要であると思われる。このたびの「第3回高校生学芸員展を終えて」では、第3回展の実施記録に重きを置きながら、第1回展、第2回展の内容も比較対象として記し、過去3カ年の状況を明らかにしたい。なお、第1回展の詳細については当館研究紀要第10号の“高校生学芸員による展覧会「ほくらの視点×あなたの出会い」を終えて”に掲載している。

### 1 高校生学芸員展の開催までの経緯

平成21年10月14日より3日間、第46回全国高等学校美術、工芸教育研究大会〈2009兵庫大会〉が本市において開催され、高等学校教育に携わる教師・研究者が全国から来姫した。開催に先立ち、関連事業として、美術館とのタイアップ業務を行いたいとする大会事務局側の提案があった。提案当初の青写真は、高校生が企画した館蔵品展を、美術館内の展示室にて開催するというものであった。その趣旨を踏まえた上で協議を重ねた結果、市民ギャラリーにおける小規模な館蔵品展を実現させることで一致した。比較的頻度の低かった高校生対象の教育普及事業に、新たな展開を図りたいという当館側の思惑は、“授業の先進的なスタイルを提示し、高校教育の可能性を拡大したい”という大会事務局側のベクトルと一致し、姫路市立姫路高等学校との連携で企画・実施された。この展覧会は多くの高校教育関係者の目にするところとなり、好意的な意見が多数寄せられ、継続の

足がかりとなった。翌年は美術館側が美術館連絡協議会に助成金を申請し、これが採用されたため開催が可能となり、姫路市内の兵庫県立香寺高等学校との連携によって開催された。第2回展にも多くの好意的意見が寄せられ、次年度の継続開催に向けての可能性を探る中で姫路市の予算が確保され、名実ともに姫路市の教育普及事業の一環として開催される運びとなった。

## 2 実施相手校の決定

第1回目の高校生学芸員展は、前述のとおり「第46回全国高等学校美術、工芸教育研究大会〈2009兵庫大会〉」の事務局の提案から開催が決まったのであるが、第2回目以降は、いわば当館が開催相手高等学校に実施協力依頼を行う形で開催の緒を掴んできた。当然ながら本事業は、実施先の高等学校の理解と協力なしでは開催できない。おそらく熟練の教諭であればあるほど、教育指導要領を礎として、経験知を生かした指導計画が構築されているであろう。そこに「展覧会企画をしませんか？」と美術館から声がかかる。教諭側から見れば晴天の霹靂であり、美術館が高校教育のフィールドに土足で踏み込むような印象を、与えてしまいかねない。「課題作品が多く時間を確保できない。」「授業には相応しいと判断しきれない、部活でなら協力できる。」「非常勤講師しかいないので実施不可。」などのコメントは、これまで姫路市内の高等学校へ「共同実施の依頼」に行った際に度々聞かされてきた。それも当然のことと言える。実際のところ、常勤の美術教師の有無や授業枠確保の困難さは、学校側・教師側の理解度いかにかわらず、実施の可否を決定する要因に成り得るし、普段から特段交流のない美術館の職員が訪ねて来て、次年度授業計画の大幅変換を要望してくるとは一体どうしたことか、と嘆きたくなるのもわかる。

そんな状況下でも開催の緒をつかんでこられた最大の要因は“全国高等学校美術・工芸教育研究大会兵庫支部”の熱心な教諭陣の存在に加え、第1回展の開催はこの研究会の事務局側からの提案で実施されたという事実であった。つまりは2009兵庫大会での「高校生学芸員展」を通して、授業の中で展覧会企画をすることができ、その結果多くの教育関係者から「教育的意義がある」とのコメントを受けた事が後ろ盾になっていた。第2回展を開催した兵庫県立香寺高等学校には、〈2009兵庫大会〉の実行委員長を務めた北川正志教諭が在籍しており、熱意をもって授業を展開し、結果を出すことができた。

姫路市には市立の高等学校が3校あり（姫路高等学校、琴丘高等学校、飾磨高等学校）、それぞれの高校に常勤の美術専任教師が配属されている。第2回展は県立高校（兵庫県立香寺高等学校）を相手高校としたことから、「次年度は市立高校との共催が相応しい」との声もあり、平成22年度中に第3回展（平成23年）の開催相手高校は姫路市立琴丘高校に内定していた。しかし、平成22年度末（3月末）に、人事異動で市立3校の美術教師すべてが異動となり、相手高校の検討が事実上ふりだしに戻ってしまった。そのため、3月末から4月初めにかけてのごく短期間に、相手高校を決定するべく、奔走することになった。最終的に、市立飾磨高等学校が実施相手校に決まり、前野フキ教諭が高校側の指導役を務めることになった。

前野教諭は、第1回展の高校生学芸員展の実施の際にも指導役を務めた同展経験者である。異動間もない時期で、生徒の実態を充分把握する暇も無い状況のもと、負担をかけてしまうことになったが、そのような中でも恙無く指導され、展覧会の達成を見ることができた。第3回展は前野氏の第1回展でのノウハウの蓄積と信頼関係、さらには理解と熱意の賜物だったと思う。

高校生学芸員役を担ったのは、市立飾磨高等学校の3年生の「総合美術」「美術Ⅱ」選択者9名である。9名中、総合美術選択者は6名、美術Ⅱの選択者は3名であった。

### 3 第3回展について

#### 〔展覧会像を模索〕

平成23年4月下旬に正式な依頼状（「高校生学芸員展」実施に関わる貴校との連携について）を発行し、飾磨高等学校からの承諾を受け、5月から連携事業をスタートさせた。

事業に先立ち、授業展開プランと展覧会像の目指すべき姿について、前野氏と意見交換をした。前年の第2回高校生学芸員展「心で見る、心で伝える」（兵庫県立香寺高等学校）での兵庫県高等学校教育研究会美術・工芸部主催の研究会にも参加してきた前野氏は、「高校生学芸員展」という展覧会タイトルや趣旨の掴みにくさに対して、問題意識を持っていた。それを解消する方法として両者の意見をすり合わせた結果、展覧会タイトルを読むだけで事業内容を想起させることができるものを目指そう、ということになった。また、前野教諭の当初からの希望は、展覧会企画を通して高校生学芸員が研究を行い、その成果を展覧会の形で公開したい、というものであった。館側もその意見に共鳴し、「高校生学芸員の研究成果を目に見える形で示す方法とは何か」が協議の中心的課題となった。

高校生学芸員展の醍醐味の1つは、「高校生らしさや個性の発揮」であろう。高校生らしさや個性の発揮は、豊かな学びの時間にこそ発揮されるものである。企画過程、もしくは完成作である展覧会そのものに豊かな学びの成果を内包させることができれば、展覧会は充実したものとなり、同時に従来の展覧会と一線を画す画期的なものに成り得ると考えた。

いわゆる一般的な方法で学芸員が展覧会を企画する場合、どのような作品をどのような切り口で提示するかを検討することが最も主要な作業となる。その検討作業の際に必要なのは、作品に関する基本情報（作者、制作年、寸法、技法、所蔵者、コンディション）と、その作品に展示の必然性を客観的に与える諸情報である。たとえば、作者の主要作品を展示する展覧会においては出品歴であったり、ある事象に関連する作品を展示する場合は、その作品と事象を繋げる文献であったり、または、作者の生涯をドキュメンタリー調で紹介する場合は、作者自らの言葉であったり実物の愛用品であったりする。いわゆる一般的な展覧会においては、これらの諸情報をいかに集め、それを研究成果としていかに公開できるかが展覧会の完成度を定める基準の1つである。しかしながら、高校生が企画する展覧会この一般的な評価基準（諸情報の質と量、提示方式）を当てはめるのが妥当であるかという点、必ずしもそうではないと考えた。文献探しや文献の裏付け調査などの学芸的活動を授業時間内に行うには限度がある。関連作品、美術書や美術雑誌等の自由な閲覧もできない環境下での調査は、既存の文字情報をピックアップして寄せ集めるだけの、奥行きのない調査になってしまうことだろう。実体験を伴わない文字情報のみによる調査は、表面的で自己的な解釈に陥る危険もある。また、有機的な学習プログラムになりにくく、意欲の増進や学習による充足感も得られにくいであろう。そうなれば、高校生学芸員に相応しい取り組みの方法を、全く異なる観点から編み出せないだろうか。

#### 〔延長画〕

意見交換の途中、高校生学芸員に相応しい取り組みの具体案として、前野氏の手がけてきた「延長画」に話が及んだ。延長画とは、画用紙の中心に名画の図版を貼り付け、その図版の周りに絵を描き足していくものであり、前野氏考案の指導方法である。第1回展「ぼくらの視点×あなたの出合い」（2009年）の企画時に前野氏が在職していた姫路市立高等学校で生徒作品を見せていただき

記憶に残っていた。その「延長画」を今回の高校生学芸員で展示したらどうか、と提案した。つまり、当館の館藏品から展示作品を一点ずつ選び、その作品の延長画を制作して一緒に展示するということである。延長画の制作に、いわば一般的な展覧会企画の上での「調査・研究」にあたる意味を担わせるというわけである。

前野氏も同じようなプランをすでに思いついていたようだが、生徒作品をプロの画家の作品に並べて展示することがタブー視される懸念があるため、提案を踏み留まっていたとのことであった。

延長画の制作は、高校生らしさや個性を発揮に期待できる方法であり、完成した延長画は高校生学芸員の取り組みの痕跡そのものである。以上の理由からこの度の高校生学芸員展の会場で延長画を展示するという方向で意見が一致し、作品選定についての協議に移行した。なお、延長画の教育的効果やねらいについては以下の通りに考えた。

①延長画制作を通して作品解釈が可能となる。

中央の図版の延長、つまり周囲の風景を想像するには、中央の図版がどのようなシーンなのかを読み取る必要がある。延長画という課題を与えることで高校生学芸員は自然に対象作品をよく観察し、それに解釈を加えることになる。そして時間をかけて創作することで作品解釈に根ざしたオリジナル作品が完成する。生徒は手を動かすなかで作品をより丁寧に観察し、作品の魅力に新たに気づくこともあろう。延長画制作は描画作業を介した作品研究と言うこともできよう。

②観察力育成に効果が期待できる

延長画で用いる図版は、縮尺やマチエールなどが現物とは異なる。とはいえ、プロの画家の描法・技法を注視して、違和感のないように描いていく必要がある。オリジナル作品の色調を再現したり、画家それぞれの形態把握の方法などを真似る中で、自然と観察眼が育成される。

③構図の妙、描写のスタイルなどに現れた作者の個性を見極め、形を変えて再現しようとする  
ことにより、技法・描法の習得にも期待できる

画家にはそれぞれの持ち味がある。色彩、マチエール、形態等にその持ち味が滲み出ている。それを視覚情報として掴みとり、続き絵として描くことにより、これまで経験のない技法に新たに取り組んだり、これまでの絵具の使い方とは違った使い方を試したり、作家の形態表現を真似てデフォルメすることもあろう。その結果、新たな描法を編み出す場合もあると思われる。

④完成した延長画を展示室で提示することで、高校生学芸員の取り組みの成果が即物的に紹介できる。

延長画の発想の源となった作品（姫路市立美術館蔵）と並べて鑑賞できる環境をつくり、比較鑑賞してもらうことで、鑑賞者が高校生の着眼点や発想の面白さに気づき、鑑賞者を新しい解釈に導くきっかけとなる。

〔作品選定〕

6～7月に作品選定の作業をするにあたって、どんな作品を選定すべきか、意見交換を行った。延長画の制作意欲をかきたてる作品ラインナップ、というのが前提になる。3500点を数える当館の所藏品から自由に作品を選ぶ方法もある。第1回展「高校生学芸員展 ほくらの視点×あなたの出会い」では全く制限を加えずに「私にとってかけがえのない一点」という基準で作品を選定していった。既存の作品解説は極力読まぬように働きかけ、一点に正面から向き合ってもらった。その結果、極めて個人的な見解を導き出せ、高校生の瑞々しい感性が解説文に投影された。

今回も初めは全く自由に候補作品を選定する方向で動いたが、各生徒の興味のベクトルが多様で、

いささか散漫な印象を与えるラインナップになることが懸念されたため、テーマを限定する方向に軌道修正を行った。今回の展覧会における所蔵品は、展示作品であると同時に延長画制作の教材の役割も担うため、延長画制作にスムーズに移れる作品を選定するのが好ましい。延長画は作品の意図を組み上げてそれにオリジナリティを付加してゆく作業である。つまり選定作品を描いた作者と共同制作する行為に近い。原作者は「他者」に他ならないが、この他者が少しでも近い存在（親近感を感じる存在）であるほうが取り組み易いのではないか、という意見でまとまった。“近い存在”と言ってもさまざまな切り口があろう。たとえば作者の制作当時の年齢が生徒の年齢に近いこと、または作品が生まれた（描かれた）年に一致していること、出身地域が近いことなどである。当館所蔵品の制作年分布等の情報を精査して検討した結果、バラエティに富むラインナップを確保するために、地域ゆかりの作家に絞込むのが現実的であると判断した。前野氏の依頼を受け、兵庫ゆかりの館蔵作家約60名の一覧を作成し、その一覧に掲載の作家の作品から出品候補を選定してもらう方向で決まった。

延長画に取り組む前に、作品を模写する作業を入れるとより一層教育的効果が高まるのではないかと、という意見も出した。画面全体を描き写す作業は、画面をくまなく綿密に観察する行為が不可欠であり、鑑賞では見落としがちな作品の細部にまで気を配らなければならない。漫然と眺めるだけでは気づかない局所に、画家の個性や作品を読み解くヒントが隠されている場合も少なくない。それゆえ、模写の作業を通じて作品のメッセージに気づくこともあろうと考えた。時間等の制約がなければ同じ技法で制作するのが最も効果的だろうが、展覧会を控えた授業時間の配分上、模写は鉛筆によるものとし、スケジュールを決定していった。

#### 〔授業スケジュール〕

「総合美術」「美術Ⅱ」の授業（それぞれ週2時間）を通じて企画・準備が進められた。主なスケジュールは以下の通りである。

5月4日	姫路市立美術館見学（松岡映丘展）
7月下旬	展示作品選定（館蔵品目録、図録を用いて）
7月28日	作品実見（収蔵庫）
9月	鉛筆による模写、解説文執筆
10月～11月	延長画制作
11月上中旬	展示計画（模型制作）、ディスプレイ原稿（あいさつ文）執筆
11月16日	額装作業、展示計画の確認
11月23日	展示作業
11月24日	展覧会開会

授業は前野フキ教諭の主導ですべて行われ、美術館学芸員である筆者はもっぱら授業に必要なデータや資料の提供と方針に関わる部分の相談役といった立場に関わることになった。

5月4日、初めの取り組みとして、美術館見学を行った。この時期に当館で開催していた展覧会は「松岡映丘展」であり、企画展示室内には館蔵品のほか、国内各地から集荷した映丘作品が展示されていた。見学に先立ち、前野教諭からは「美術館という施設に全く入ったことの無い生徒ばかりなので、展覧会というものがどういうものなのか、また、作品はどんなふうに鑑賞するのかをレクチャーして欲しい。」との要望があった。9名全員が前野教諭の引率で来館した。美術館講堂にて美術館の施設概要や作品の鑑賞について話をした後、展覧会場での鑑賞。各々のペースで展示室

を回ってもらった。

6月下旬から、前野氏主導で作品選定作業を行った。館蔵品の掲載された図録や所蔵品目録を高校に運び入れ、7月下旬までに作品の荒選定作業を完了させた。選定作品は一人5点程度としたが、モノクロの小図版を主体とした資料による絞り込みの作業には困難が伴ったようで、一人5～9点の選定となった。

荒選定リストを前野氏から受け取り、当方で作品のコンディションや使用予定の有無、生徒間の重複を精査し、展示の可否を回答。それを受けて一人あたり2～6点の実見可能作品リストを作成した。

7月28日には収蔵庫での作品実見を行った。実見に先立ち、館側では対象作品28点の実地でのコンディションチェックと下準備を行った。箱で保管している作品は開梱し、スペースを確保して並べ、露出保管している作品もすぐに提示できるように必要に応じて移動した。10名近い高校生学芸員が一度に収蔵庫内に入ることは、貴重な収蔵品を保存している我々館職員にとって緊張感を伴うことであり、事故防止に十分な配慮が必要である。実見当日、収蔵庫のある建物内に集合した高校生学芸員8名（1名病欠）を前に、実見に際し守るべきことを周知し、前野教諭と美術館側の職員2名が高校生学芸員8名とともに入庫した。

高校生学芸員それぞれには、書き込み式の調査票「仮決定した作品の記録」を2枚ずつ配布し、出品候補作品（実見作品）を2点に絞った上で記入するよう説明した。調査表には、基本的な作品情報（作品タイトル、作者名、制作年、サイズ、材質）のほか、作品を見た印象や簡単な作品の図などを書き込む形式となっている。展示作業時前に作品を実見する機会は1回限りであるため、今後の各種作業（解説文執筆など）に必要な情報を極力多く記入するよう伝えた。

当館学芸員が高校生学芸員4名ずつ担当し、はじめにツアー形式で全作品の場所を示したのち、高校生学芸員が個々に自分の候補作品を吟味していった。ツアー形式といっても、作品の解説は行わないよう努めた。高校生学芸員と作品そのものの対峙の時間を重視する意図があったためである。視覚芸術である作品を読みとる行為は、時に知識的なアプローチを強いることにより阻害される場合もある。初めての作品との出会い、そして作品そのものから受ける印象に素直に耳を傾け、作品と対話する姿勢こそ作品鑑賞の上で重要なことである。

高校生学芸員8名は初めて見る収蔵庫内の風景に初め戸惑いつつも、図版で見慣れた選定作品を前にすると思えばいい意見の言いながら真剣に実見した。「展示作業の日まで、もう実物を見る機会が無いのでしっかり見ておくように」との前野氏の助言に反応し、鑑賞態度がさらに熱心なものになった。延長画制作の資料として活用できるよう、デジタルカメラでの簡易撮影も行った。

夏休みを経過して、9月に鉛筆による模写（A4上質紙）や解説文の執筆、10月から延長画（B2ワトソンボード）の制作に移った。延長画制作の導入に際しては、前野教諭が参考作品を提示しながらそれぞれの着眼点やアプローチの方法を紹介し、「原画を活かし、そのまま続き絵を描き足していく方法」と「原作からイメージした別の作品（パロディ）を描く方法」があることを伝え、どういった表現方法が自分に適しているかを考えさせた。その結果、大変バラエティに富んだ表現が11月中旬には完成した（写真）。



左：青山熊治「パレットを持つ自画像」

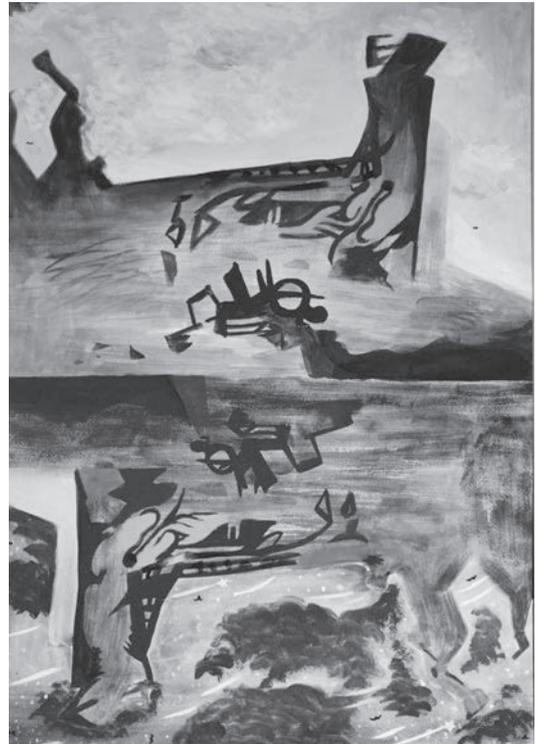


右：高校生学芸員による延長画  
〔自画像（貼付図版）が自画像を描いている〕



左：山本敬輔「作品」

右：高校生学芸員による延長画  
〔上下で昼と夜の世界を描く〕



11月にはあいさつ文の執筆や展示模型を制作しての作品配列の検討も並行しておこなった。これらの作業は、すべて前野教諭の指導のもとに行われ、美術館学芸員（本丸）が高校へ赴いたのは、解説文の指導に加わった10月5日と11月9日と額装を行った11月16日のみである。

11月16日には、美術館から持ち込んだ9点の額に合わせて調達したマウントに作品を固定し、額に入れる作業を2名一組で行った。額に収まった作品を見て照れ臭そうに眺める生徒や「私の作品が上等に見える！」と興奮する生徒など、静と動の反応に生徒の個性を垣間見る時間であった。

#### 〔展示作業〕

展示作業は、一般的な展覧会と同様に、美術品輸送の専門業者に委託して行った。作業日（11月

23日)は祝日であり、朝9時30分からの展示作業には高校生学芸員が全員加わることができた。まずは高校生学芸員と美術品輸送の専門業者スタッフの相互自己紹介を行った。指導者(筆者と前野教諭)が作業の流れや役割分担を説明し、その後、展示の専門スタッフにコメントをいただいた上で作業を開始させた。高校生学芸員は作業員の補助的活動(作品箱の移動、照明器具設置など)を行う一方で、現場監督としてのスタンスでも立ち会い、作品の配列順序や高さ、キャプション位置等の検討も行った。

展示に先立ち、作品の配置について立体模型を用いて検討を重ねていたが、現場に作品を移動してはじめて認識できることも多く、再考を余儀なくされた。そして当初予定していなかった壁面を新たに増設し、位置の変更を重ねた結果、高校生学芸員自身が納得できる展示空間を実現することができた。

前半は指示された通りにしか動けなかった高校生学芸員も、午後には「今自分には何ができるか」を考えて進んで行動していた。リーダーシップのある高校生学芸員が自然と中心になり、他のメンバーの意見を引き出そうと声掛けをする姿や、積極的に補助作業に入る姿もあり、たった一日でも生徒の姿勢に変化が見られた。展示作業は美術品輸送専門のベテランスタッフとの共同作業であり、「いつも緊張感をもって臨んでいる」という仕事人の言葉や、展示作業の合間の美術品の扱いに関するミニレクチャーが、少なからず高校生学芸員の姿勢を変える要因になったと考える。また、同日の午後3時より、展覧会の受付・監視を担う当館のボランティアスタッフ(インフォメーション班)の研修会を会場内で行った。展示作業はこの時間には殆ど終了していたので、ボランティアスタッフと高校生学芸員の顔合わせができた。高校生学芸員にとっては、美術館を支えるボランティアスタッフと出会うことで、展覧会というものがいろいろな人の支えがあって初めて開催できる、という認識を新たにしたいと思われる。一方ボランティアスタッフにとっても展覧会そのものへの愛着心を増幅するきっかけになったかもしれない。

#### 4 1 回展、2 回展との比較

これまで第3回展の概要と特色を述べてきたが、第1回展、第2回展とは着眼点や方向性などにも差異が認められる。まず、第1回展～第3回展の開催データを表にまとめ、第1回展、第2回展の特色について記したい。

【対照表】

展覧会	第1回展	第2回展	第3回展
展覧会名	「ほくらの視点×あなたの出会い」	「心で見ると、心で伝える」	「高校生が選んだ郷土の名品展－姫路市立飾磨高等学校 高校生学芸員の成果－」
会期、入場者	平成21年10月14日(水)～17日(土)4日間 379名	平成22年10月2日(土)～10日(日)9日間 823名	平成23年11月24日(木)～12月4日(日)11日間 700名
実施高等学校(担当教諭)	姫路市立姫路高等学校(前野フキ)	兵庫県立香寺高等学校(北川正志)	姫路市立飾磨高等学校(前野フキ)
高校生学芸員	3年生12名	3年生18名	3年生9名
授業科目	美術Ⅱ(週2時間)	構成(芸術系列)(週2時間)	総合美術(6名)、「美術Ⅱ」(3名)それぞれ週2時間
展示作品	姫路市立美術館所蔵品12点	姫路市立美術館所蔵品18点	姫路市立美術館所蔵品9点、鉛筆模写9点、延長画9点

ディスプレイ	外注：あいさつパネル、 展覧会看板 自作：解説パネル2種、 キャプション	外注：あいさつパネル、 展覧会看板、章解説パネ ル4種等（デザインラフ は高校生学芸員が作成） 自作：解説パネル、キャ プション	あいさつパネル、展覧会 看板、展示物についての 説明パネル、解説パネル、 キャプション ※すべて外注
特色	・かけがえのない「私の 一点」を選び、それと対 峙し、熟考する中で解説 文を作成。学芸員の一般 的な解説と対照させる形 で展示。	・展示テーマから章解説、 作品解説まで、高校生が 主体となって協議の上決 定。 ・ギャラリートークにも 挑戦。	・展覧会の企画業務は概 要を学ぶのみとし、その 分確保した時間を利用 し、模写、延長画制作の 時間を確保、制作を通し て作品にアプローチ。

※会場はすべて姫路市民ギャラリー特別展示室（イーグレひめじ内）

※館側の指導役はすべて筆者が担当

### 〔第1回展の授業の流れと特色〕

第1回展は姫路市立姫路高等学校3年生12名が高校生学芸員として参加したもの。大まかな授業の流れは、以下の通りであった。

- ①「展覧会」「作品」そのものについて学ぶ
- ②学芸員の仕事の概要を学ぶ
- ③展覧会ができるまでの業務を学び企画書作りを体験
- ④企画展の方向性を決定し、趣旨を理解した上での作品選定
- ⑤展覧会タイトルの決定、あいさつ文の作成
- ⑥作品解説、展示図、会場模型、チラシ、キャプション・パネル等の作成
- ⑦展示・設営作業立会い
- ⑧総括

授業はほぼ全て前野教諭の主導で行い、美術館学芸員は、必要に応じて講義を行うという立場で参入。展覧会業務を体験することを主眼に進められた。

企画書作成の練習をすることで展覧会企画に主体的に関わる機運を高めたのち、指導者側で展覧会の方向性（作品選定の根拠等）を検討した結果を高校生学芸員に表明し、理解を得てから一人ずつ出品作品を選定した。美術史上の価値や作家の名前で作品を選ぶのではなく、地に足をつけて、自分の目と心（頭）で選ぶ方法を取った。テーマは「自分自身にとっての（かけがえのない）1点」。その後、担当作品（一人一点）に正面から向きあい、解説文を作成した。解説文は文字データに頼らず、高校生学芸員自身の内面から出てきた言葉によるものが望ましいと伝え、観察と思考を通して独自の解釈に到達するよう働きかけた。解説文の提示の仕方については、やや実験的な試みを行った。高校生学芸員の解説パネルの文章に秘めた「高校生の思考の結晶としての解説文の面白さ」を際立たせるためのしかけとして、もう一つの「解説」（担当学芸員が作成）もあわせて展示した。担当学芸員が作成した解説文は、主観が入らないオーソドックスな知識ベースの解説である。

完成した展覧会の一番の見どころは、何よりも高校生学芸員の解説文によって観覧者の中に呼び起こされる、高校生の内面世界にあったと思う。来館者はそれぞれの解説を読み比べることによって「高校生の素晴らしい感性に触れられて感動した」などの好意的な意見をいただいた。

### 〔第2回展の授業の流れと特色〕

兵庫県立香寺高等学校3年生18名が精力的に企画実施した第2回展「心で見、心で伝える」

については、第一回展の「展覧会企画という業務を体験」する方向性をより推し進める形で授業を展開した。大まかな授業の流れは以下のとおりである。

- ①「展覧会」「作品」そのものについて学ぶ
- ②美術館見学（設備・展示）
- ③展覧会ができるまでの業務を学び企画書作りを体験
- ④企画書作り（プレゼンテーションによるグループ選抜）
- ⑤展覧会のテーマ・章立ての決定（プレゼンテーションによる）
- ⑥作品選定
- ⑦作品解説の執筆
- ⑧展覧会タイトル検討
- ⑨あいさつ文、広報印刷物デザイン、会場模型などの作成をグループ単位で実施
- ⑩展示構成、展示物作成
- ⑪展示・設営作業立会い
- ⑫会場受付・監視、高校生学芸員によるギャラリートーク（会期中）
- ⑬総括
- ⑭姫路市立美術館の企画展「江見絹子展」の鑑賞（振り返り）

美術館について知るところから始まり、展覧会が完成するまでの業務についてさまざまな資料を用いて学んだ後に、実際の企画業務に入った。第1回展の「ほくらの視点×あなたの出会い」では、1人1点ずつ選んだ作品を寄せ集める形で展覧会を実施したが、第2回展では、展覧会の大テーマや章分けについても班毎に意見をたたかわせ、プレゼンテーションによる相互評価で決定していった。相互評価の作業を通じて、皆で1つの展覧会を作るという意識が高まり、意見を聞く・話すスキル（コミュニケーション能力）を伸ばすという点でも成果があったようだ。また、展示作品の選定については、テーマや展覧会のストーリーに即したラインナップを目指す、という明白なものさしがあり、各章ごとに担当班を付け、班内でバランスを考えることで出品作品を決定した。漠とした展覧会イメージに徐々に具体的要素を加え、展覧会を形作ってゆく方法は、いわゆる一般的な学芸員の展覧会企画方法と同様である。作品の選定の際に、展覧会のストーリーや他の作品との相互関係を考察したことにより、作品のラインナップ上の必然性について学ぶこともできたと思う。そのため、展覧会企画を擬似体験するという部分においては、1～3回展の中で最も厳密性があったように思う。学芸員の業務について幅広く体験させたい、という担当教諭（北川正志氏）の率直な意志表示があったため、美術館学芸員が教育現場（県立香寺高等学校）に赴く頻度が高かったのも特記しておきたい。週に2時間の授業（金曜の午後2コマ続き）の殆どに参加し、北川教諭と教壇に立った。現場の教師が展覧会企画を授業で行うためには、当然ながらそのためのノウハウが必要である。ましてや可能な限り事実に近い形での職業体験をすることが求められる場合、学芸員の現場参入の頻度は高くなるのは当然のことであろう。

第2回展の特色は上記のように展覧会企画の体験そのものに力点を置いただけではない。

会期中は可能な限り高校生学芸員が受付・監視活動に参加したほか、学芸員の教育普及業務の疑似体験として、「高校生学芸員によるギャラリートーク」も実施した。

## まとめ

3回の高校生学芸員の実施状況を眺望する中で、それぞれの差異について述べてきたが、まとめとして、共通する部分について触れてみたい。「高校生学芸員による展覧会」において最も重要視すべき点は、高校生学芸員展が他の展覧会と性格を異にしている所以、つまり企画主体が他ならぬ

高校生だという点である。平成21年度に初めて、美術についての専門的なノウハウや知識などを持たない高校生に展覧会企画を体験してもらうというプロジェクトを敢行した目的は、画期的で充実した教育の機会を高校生に提供することであった。その事業を展開する過程において指導者が課題として認識してきたものは、企画過程とその成果物である展覧会において高校生らしさに起因する豊かさや魅力をいかに引き出せるか、ということであった。その課題は、実施相手高校や担当教諭が変わっても常に生徒指導者側の共通意識下に常に存在していたと思う。

我々美術館の学芸員はできあがった展覧会が充実した奥行きのあるものとして花ひらくことを望んでいるし、その企画過程で自己実現が伴えばなおさら光栄なことである。しかし、当然ながら展覧会は、学芸員はじめとする実施主体のためにあるものではない。展覧会というものがそもそも、公開を主旨とするものである以上、受容者である観覧者がその展覧会に存在意義を見出し、またはその展覧会によって何らかの良質な影響を受けることができるかが、その展覧会の評価を決める要因である。高校生学芸員展もその部分は同じで、準備期間を経てひとたび展覧会として公開がスタートすれば、鑑賞者それぞれの目に評価が委ねられることになる。しかし、「鑑賞者の評価基準」と一言で言っても、具体的には展覧会の内容により鑑賞者の性質が異なってくるため、自ずと評価基準にも多様なパターンが存在すると思われる。高校生学芸員展については、展覧会名に“高校生”とあることにより、教育関係者や高校生の来場率が高いと予想されたが、当館が主催した第2回展、第3回展の結果を見ると一般観覧者（学校関係者以外）が圧倒的に多いという結果が出た（下のアンケート集計結果参照）。

アンケート集計結果（一部抜粋）

展覧会	第1回展		第2回展		第3回展	
回答数	58（男29、女29）		69（男40、女29）		59（男35、女24）	
回答者年齢	10代	22.4%	10歳未満	1.4%	10代	11.9%
	20代	10.3%	10代	17.4%	20代	1.7%
	30代	8.6%	20代	4.3%	30代	1.7%
	40代	15.5%	30代	8.7%	40代	13.6%
	50代	17.2%	40代	13.0%	50代	23.7%
	60代	20.7%	50代	8.7%	60代	22.0%
	70代以上	3.4%	60代	15.9%	70代以上	20.3%
	不明	1.7%	70代以上	21.7%	不明	5.1%
			不明	8.7%		
関係者の割合	不明		実施高校生徒	7.2%	実施高校生徒	5.1%
			実施高校教師	5.8%	実施高校教師	5.1%
			実施高校保護者	0%	実施高校保護者	3.3%
			教育委員会	0%	教育委員会	1.7%
			教職員	2.9%	教職員	8.5%
			その他一般	84.0%	その他一般	67.8%
					不明	8.5%
展覧会の感想	大変良かった	55.2%	大変良かった	56.5%	大変良かった	64.4%
	良かった	39.7%	良かった	40.6%	良かった	23.7%
	普通	3.4%	普通	1.4%	普通	8.5%
	やや不満	0%	やや不満	1.4%	やや不満	1.7%
	不明	1.7%				
学校関係者の感想	参考になった	34.5%	自分の学校でも実施したい	11.6%	自分の学校でも実施したい	6.8%
	参考にならなかった	3.4%	自分の学校では実施したくない	1.4%	自分の学校では実施したくない	0%
	その他	0%	その他	4.3%	その他	5.1%
	未記入	62.1%	不明	82.6%	不明	88.1%

第1回展では「大変良かった」と「良かった」の割合を積算すると94.9%、第2回展で97.1%、第3回展で88.1%といずれも高い満足度がうかがえた。高校生学芸員の作品（延長画と鉛筆模写）

を展示した第3回展については64%もの回答者が「大変良かった」と回答している。では、どんな点に展覧会の魅力を感じたかについては、大変多くの意見（自由表記）をいただいた（コメント記入率：第1回展67.2%、第2回展79.7%、第3回展81.4%）以下の表に、コメントの主旨ごとの、全コメントに占める割合をまとめる。なお、1枚のアンケートに複数の主旨を含んだコメントがある場合、主旨数を積算した結果、第1回展のコメント件数は53件、2回展は69件、3回展は84件となった。

コメント主旨	第1回展 (53件中)	第2回展 (69件中)	第3回展 (84件中)
展覧会の趣旨に賛同、賞賛したもの（継続希望含む）	13件（24.5%）	17件（24.6%）	26件（31.0%）
高校生学芸員の姿勢、感性を賞賛したもの	7件（13.2%）	12件（17.4%）	11件（13.1%）
高校生学芸員の解説文を賞賛したもの	7件（13.2%）	11件（15.9%）	2件（2.4%）
高校生学芸員を激励したもの	3件（5.7%）	4件（5.8%）	10件（11.9%）
自分も参加（経験）したい、との意志表示	2件（3.8%）	2件（2.9%）	3件（3.6%）
参考になった、発見があったとの意志表示	3件（5.7%）	7件（10.1%）	5件（5.9%）
規模の拡大を望む、との意思表示	3件（5.7%）	2件（2.9%）	2件（2.4%）
展示作品（姫路市美所蔵品）を賞賛するもの	1件（1.9%）	5件（7.3%）	3件（3.6%）
不明点、疑問点を呈したのもの	0件（0.0%）	2件（2.9%）	1件（1.2%）
精神的な充足感が得られたとの意志表示	1件（1.9%）	1件（1.5%）	4件（4.7%）
（第1回展）解説の提示方法に賛同、賞賛したもの	5件（9.4%）	—	—
（第1回展）解説の提示方法に疑問を呈したのもの	1件（1.9%）	—	—
（第3回展）延長画を賞賛したもの	—	—	12件（14.3%）
その他	7件（13.2%）	6件（8.7%）	5件（5.9%）

また、主催者側（高校生学芸員）の、展覧会後の主要な感想も以下に抜粋する。

- ・ いい経験ができた。機会があればまたチャレンジしたい。
- ・ 悪戦苦闘したところもあったが楽しかった。
- ・ 展覧会が多くの人に支えられてはじめて実現することを体験でき有意義だった。
- ・ はじめは不安だったが、展覧会が実現できて嬉しい。
- ・ （監視・受付業務中に）来館者に温かい言葉をかけていただき、嬉しかった。
- ・ どんなに小さい展覧会でも裏方の存在はとても大きいことに気づけた。
- ・ 思っていたより立派な展覧会として完成したので嬉しかった。
- ・ 人にものを伝えることの難しさなど、多くのことを学べた。

全般的な傾向として、鑑賞者側も、主催者側（高校生学芸員）もこの展覧会について好意的な反応を示したことが上表の数値や感想文面から明らかになったと思う。高校生学芸員の中には、本事業の経験を通して、美術館に携わる業務へ進路変更したというケースも散見されており、将来への影響も想像させる。

姫路市立美術館では平成24年度も高校生学芸員展を開催する予定であるが、今後も継続的に魅力ある展覧会に向けた、教育的な可能性を追求していく必要を感じている。

熱意ある高校教諭との出会いと連携から生まれる可能性にさらに期待しつつ、本稿をとじたい。

（ほんまる いくの 当館学芸員）